

伊勢湾西岸地域

吉田 史郎 = 地質調査所地質部

地形の概要

岩相層序

- ・ 亀山地域
- ・ 四日市地域
- ・ 多良地域と員弁地域
- ・ 御在所山地域

層序のまとめ

地質構造

東海湖盆の古地理 - 伊勢湾西岸を中心に -

地形の概要

編集 本日は、伊勢湾西岸の東海層群についておうかがいしたいと思います。最初に、この地域の地形の特徴からお願いいたします。

吉田 伊勢湾西岸地域の地形は、等高線の入った図の方がその特徴がよくでますから、図1・1の埋谷面図を用いて説明します。この図には、これからお話しする内容を理解していただくために、埋谷面上に、丘陵と段丘・扇状地や断層などの分布も描き加えてあります。

図1・1に表現されているように、伊勢湾西岸には、西側が鈴鹿山脈と布引山地、北側が養老山地に境された細長い低地帯が広がります。この低地帯は、標高300m以下の丘陵、段丘や隆起扇状地、そして沖積平野からなります。東海層群は、雲出川中流域を除く低地帯に堆積しているのですが、地表でみることができるのは、おもに丘陵地です。

低地帯の西を限る鈴鹿山脈は、東西両縁とも断層によって限られた地塊山地ですが、図をよくみますと、御在所山をはじめとする1,000mクラスの山体は全体として東に片寄って並び、し

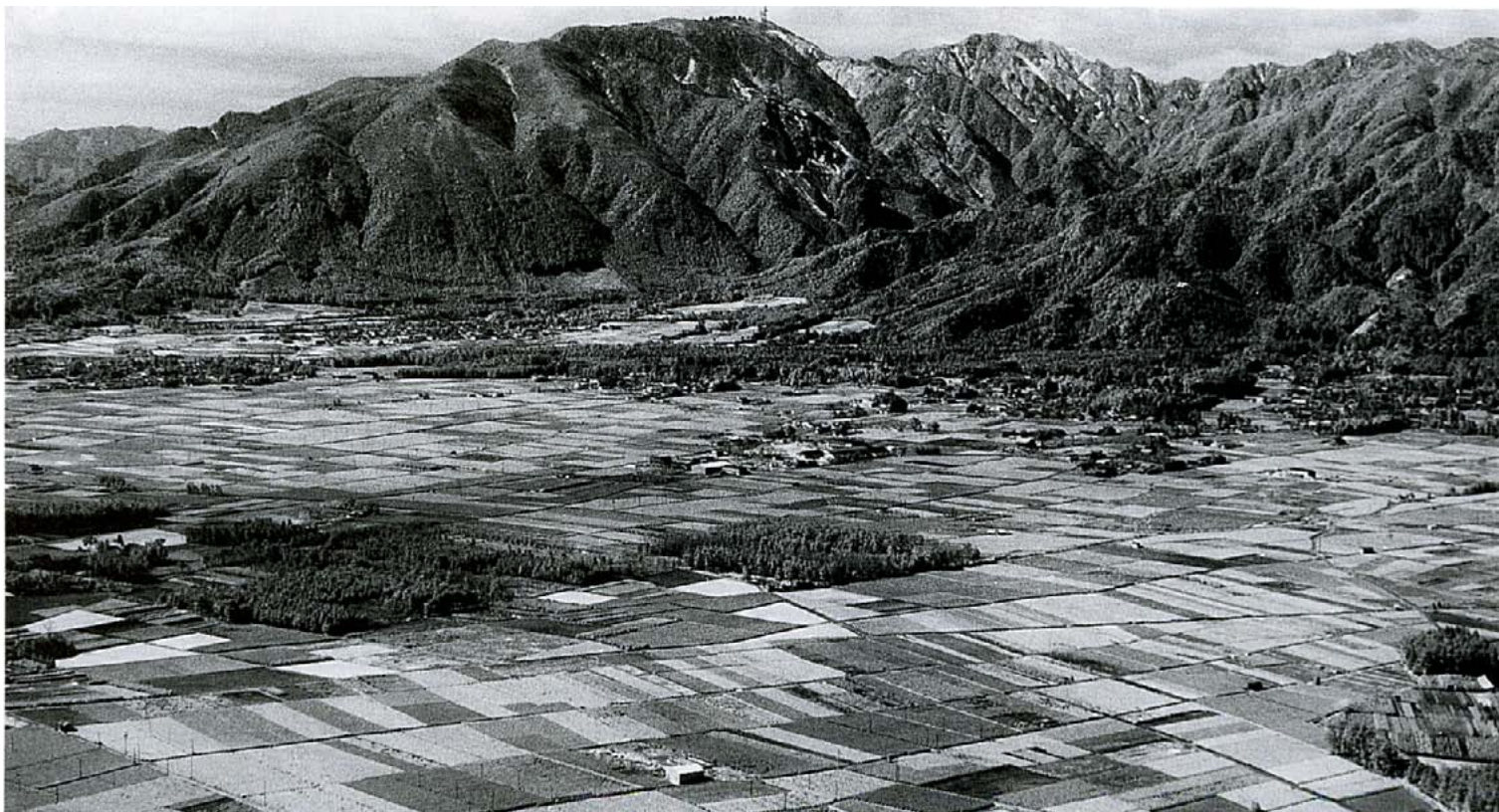
かも東側の山腹斜面は、北から南まで一様に急峻な勾配で低地帯に接しています。逆に、西方の近江盆地側に続く山腹斜面の方は、比較的緩やかな勾配で西側山麓に達しています。ですから鈴鹿山脈は、西に緩く傾く傾動地塊山地ということになります。

鈴鹿山脈は第四紀にも隆起し、しかも山地東縁を走る一志断層系の一部は活断層です。そのため、鈴鹿山脈の山麓前縁では、新旧の段丘や隆起扇状地が何段も発達しています。また低地帯を流れる河川自体も、西から東に向かって伊勢湾に注ぎ込む形を示します。現在の河川名で申しますと、朝明川・海蔵川・三滝川・内部川・鈴鹿川・安濃州・雲出川などの河川が、これに当たります。

東海層群は河川侵食にさほど強くない地層ですから、東海層群からなる丘陵は、これらの主要河川によって東西方向に大きく分断されることになり、その結果、低地帯の中に東西に細長く伸びる丘陵帯が、南北方向にいくつも配列するという格好ができ上がります。このように、同じ南北方向に連なる丘陵帯ではあっても、知多半島の丘陵帯とは、地形的特徴がいくぶん違っ

写真 - 鈴鹿山脈の入道ヶ岳東麓付近の断層崖と水沢扇状地面の俯瞰

地質調査所刊、5万分の1図幅「亀山」より。



ているわけです。

丘陵帯の地形配列にみられるもう一つの特徴として、四日市市北部から桑名市にかけて、南北に並んでいる丘陵帯の存在が指摘できます。普通、山地から海岸に向かう地形配列は、山地→丘陵→台地→平野の順になるのですが、ここでは、台地よりも海岸側に丘陵帯が分布します。このちょっと異常ともいえる地形配列ができ上がったのは、この丘陵帯の東にある活断層群の西上がりの運動によって、東海層群中に背斜構造やドーム状構造が形成されたからです。さらに、これより北の低地帯北部に目を向けますと、ここでは北縁が養老山地によってさえがられています。養老山地も、東縁が東落ちの養老断層で限られた西に緩やかな傾動山地です。ですから低地帯北部は、鈴鹿・養老の2つの傾動地塊に挟まれた断層角盆地ということになります。この盆地にも、後ほど述べますように、東海層群が厚く堆積しており、山麓に接した丘陵には、東海層群が露出しています。ここでは、盆地北部の牧田川は北に流れて、養老山地北縁を迂回して揖斐川に合流し、盆地南部の員弁川は南南東に流れて、伊勢湾に注ぎ込んでいます。ちなみに、この牧田川と員弁川を分つ丘陵の稜線が、ちょうど岐阜県と三重県の県境になっています。

丘陵の主体は東海層群からできているのですが、その頂部のところどころには、伊勢湾東岸と同じように、中部更新統、たとえば見当山累層といったクサリ礫を含む地層が薄くのっています。また丘陵周辺には、段丘や隆起扇状地が分布しています。たとえば内部川流域には、水沢（内部川）扇状地と呼ばれている隆起扇状地が広く発達しています。そして丘陵帯と海岸線の間には、幅数kmの海岸平野が南北に伸びています。この海岸平野の地下には、厚さ数10mの上部更新統と完新統が堆積しています。以上で、この地域の地形のあらましの説明を終わりますが、このような地形の枠組みができ始めたのは、第四紀に入った頃からで、とくに低地帯内部の地形は、第四紀でも最近の地殻変動や海水準変動によって形成されています。この点は、後ほど東海層群の地質構造と関連させながら、2～3の例をあげて説明するつもりです。

図1・1 - 伊勢湾西岸地域の地形概略図

